

道二翁道話二篇

上

9  
3406  
3



中澤翁

中澤翁道話二編

刻朱題卷端

後話神儒釋老原

懸河唇舌震乾坤

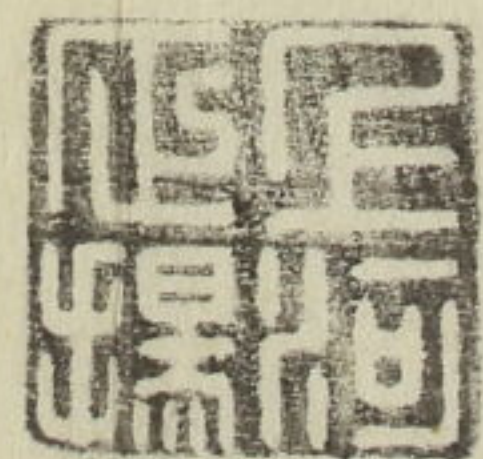
道話二編

序

故櫻井理行氏  
 大正四年十二月廿三日  
 櫻井十可氏  
 寄贈

9  
3406  
3

從<sup>レ</sup>如<sup>ク</sup>蝨<sup>ノ</sup>虫<sup>ノ</sup>歎<sup>ク</sup>輩<sup>ノ</sup>車<sup>ノ</sup>  
深<sup>ク</sup>顧<sup>ミ</sup>盡<sup>ス</sup>心<sup>ヲ</sup>知<sup>ル</sup>性<sup>ノ</sup>論<sup>ヲ</sup>  
平<sup>ク</sup>安<sup>ク</sup>淇<sup>ノ</sup>水<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>主<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>



道一

翁道話二篇卷上

八宮齋輯



道須臾離<sup>ハ</sup>を<sup>レ</sup>バ離<sup>レ</sup>た<sup>ハ</sup>道<sup>ニ</sup>よ<sup>リ</sup>ん<sup>バ</sup>。以<sup>テ</sup>道<sup>ト</sup>と  
りて<sup>ハ</sup>何<sup>ゾ</sup>道<sup>ニ</sup>し<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>あ<sup>ガ</sup>有<sup>ク</sup>。道<sup>ハ</sup>朝<sup>ノ</sup>つ<sup>ハ</sup>晩<sup>まで</sup>  
孔<sup>も</sup>切<sup>テ</sup>有<sup>ク</sup>多<sup>ク</sup>と<sup>ハ</sup>心<sup>ノ</sup>學<sup>ノ</sup>の<sup>カ</sup>が<sup>な</sup>ん<sup>と</sup>移<sup>ル</sup>う<sup>見</sup>  
ぬ。道<sup>ハ</sup>上<sup>ト</sup>下<sup>ト</sup>よ<sup>明</sup>く<sup>誰</sup>が<sup>起</sup>し<sup>も</sup>せ<sup>ぬ</sup>れ<sup>ど</sup>夜<sup>が</sup>  
わけ<sup>ハ</sup>い<sup>ち</sup>ぢ<sup>り</sup>く<sup>か</sup>何<sup>く</sup>。す<sup>ま</sup>り<sup>ハ</sup>雀<sup>の</sup>道<sup>か</sup>ん<sup>ハ</sup>鳥<sup>の</sup>  
の<sup>ハ</sup>犬<sup>ハ</sup>い<sup>ぬ</sup>の<sup>ハ</sup>猫<sup>ハ</sup>ね<sup>の</sup>こ<sup>の</sup>ハ<sup>鮒</sup>い<sup>や</sup>の<sup>ハ</sup>鯉<sup>ハ</sup>  
鯉<sup>の</sup>ハ<sup>鯨</sup>ハ<sup>鯨</sup>の<sup>道</sup>。綱<sup>ハ</sup>い<sup>づ</sup>し<sup>の</sup>ハ<sup>女</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>ま<sup>は</sup>  
よ<sup>の</sup>ハ<sup>か</sup>ん。其<sup>外</sup>氷<sup>情</sup>の<sup>草</sup>本<sup>よ</sup>り<sup>ま</sup>ぐ<sup>ハ</sup>柿<sup>の</sup>木<sup>ハ</sup>

道話二篇

柿の本の及。梨の本の及。の木の道。柳ハミどりむハ  
紅井。かのむくぐたの通りを。ぬめりみて。かきもたよ  
背くものへたふ。万物一神道の外は。教もたう。教  
の外は。道もたう。人の及。有て五倫五常の外  
よ人のないとも。母の胎内は。一滴の水が。や。や。や。  
道へ。やんと。ゆり。切て。つら。なれど。かな。し。い。ゆ。い。や。  
生か。子。が。お。ま。り。よ。お。ま。り。き。て。佛。を。ま。り。か。り。せ。か。し  
に。よ。や。あ。い。ま。い。お。ま。り。よ。お。ま。り。か。り。せ。か。し。  
こ。れ。か。り。ぬ。が。ら。ら。ら。の。り。で。も。見。て。ぬ。と。お。ま。り。か。り。せ。か。し。  
お。ま。り。か。り。せ。か。し。や。お。ま。り。か。り。せ。か。し。や。お。ま。り。か。り。せ。か。し。

是ハ生かぬ。ぬ。先き。か。り。天。地。自。然。の。と。く。ぬ。き。と。い。ふ。の  
で。則。是。が。道。と。や。ま。り。か。り。せ。か。し。佛。と。遠。く  
な。ら。ど。か。な。き。と。い。ふ。其。の。貫。き。の。及。と。な。る。ゆ。に。  
鬼。と。な。る。こ。と。を。思。ひ。及。に。離。れ。い。は。し。し。  
その。な。れ。ば。た。物。事。に。執。着。す。る。ゆ。に。と。や。執。着。と  
ハ。物。事。に。執。着。す。る。事。と。や。放。心。す。る。の。と。や。放。心。と。ハ。向  
ふ。こ。と。を。思。ひ。及。に。離。れ。い。は。し。し。  
ゆ。に。見。て。ぬ。と。い。ふ。は。見。て。ぬ。と。い。ふ。は。見。て。ぬ。と。い。ふ。  
し。か。り。け。い。と。見。て。ぬ。と。い。ふ。は。見。て。ぬ。と。い。ふ。  
る。と。や。ふ。り。て。道。を。皆。も。ら。る。ば。離。れ。い。は。し。し。

道はつづべ。たゞ何んぞ心のみとや。神をいふも  
 公の事。佛をいふも。儒をいふも。公の事とや。儒  
 道てい教をいふも。佛家をいふも。遠くよりい  
 たり。遠くよりいづる伏魔や。女中方の耳をき  
 こふりゆく。遠くよりいづる。知れぬ。扱は教をいふ何ん  
 とも外のみと云ふらん。いふ遠くよりいづる事。つづゆく。  
 聖人佛がけ教と御をなすは。この事とや。い教とや  
 とそ。神佛聖人の心作でもなる。天地自然のたふ  
 通ひといふ事。のなる事と心知りなす。して。理  
 心教なるものトヤ。遠くは教へぬ。一切百物畜教

鳥取草木と動もた。天より降り。降りて。通うのた。と  
 り。つづゆく。つづゆく。遠くよりいづる。この事とや。い教とや  
 とそ。神佛聖人の心作でもなる。天地自然のたふ  
 通ひといふ事。のなる事と心知りなす。して。理  
 心教なるものトヤ。遠くは教へぬ。一切百物畜教

分敷する。何月幾日よ迎落する身投する首らるる  
中するといふ事知つる若も人も有りませらん。知らる  
しそ毎新く色とぬくの事がおあるとゆへへの  
皆うりりしそ覺悟があらぬとや。思ふにけ覺悟を  
みるゆへ日よ新く覺悟をさしゆくのかほが厚ひゆく  
怪我がたふに怪我がの本といひ違ひらるや。その  
迷いとさくく見もい夏向き此とりし虫が定り  
う。春うつとつと遠入る。生殺の境よでありては  
てなる。ひひゆく向くゆもる。さうさうさうさう  
道もたふあくけりさる。立ゆ色へ何んの事いなる。

其立ゆるゆと知ぬとや。聖人の教へけ立ゆるゆ  
らるり。去るも江戸で十一才なる子が。前訓法  
法てけ立ゆるゆと知らる子がある。其子が何んたる  
遊んごやれべ。駕りまがらひのよて駕りてある。  
其子何んも去るべし居るれへ。駕りて身投で子の春  
中とあつたたり。其子大さく版が立るれど。あつ  
家。前訓で法。堪忍のふとや。とらと思へく。  
能よ立ゆりて見らるへ何んの事いなる。胸をがよ  
夫ら内へ戻りて。親心根よまよ立ゆりて事と必ほ  
能らへ。親心根い大さくまらるんで。今く前訓の

道詰二篇 卷二

此後でかきりしと人とも因縁し収んで  
ごごつ。其子一生災難の種ハ消て仕向よとい  
ふて私も信じませ。一切のゆがまゆりて  
向よ画ひゆいたん

我うたよく画ひつるもの人のけしきい家けきなり  
皆我身よ主ゆぬゆらまはと恨親とうみ終る家  
と失い方と亡に大事のゆとや皆終る身ゆり  
えく腹の中よ足がゆら懺悔となされませ。親  
づる人かゝる。親のまへとけくまへづるかゝる  
ら。友人のあへるとけくまへづるかゝるハかきりくよ

本一層りしと。恨を中しと。そとでかきり  
トよまかせしと。げしと。懺悔なされませ。懺悔の  
功德ハ之始の罪業消滅すると。佛様の心流と重ん  
じようそのたんとゆとやかきり。身よゆりんそと  
なされ中させ。身よ悪業さかへ懺悔ハ入ぬ事  
かんと悪業消すのん。ゆらまへたんとゆとや。終  
すて見ゆ。身よ二つ。始る。五塵の内でも見ゆ  
の二つを深く戒て有る目と耳とが。あし。心  
痛し。時ハあし。ハかゝる。痛し。時ハあし。ハあし。ぞ。  
痛し。時ハあし。ハかゝる。痛し。時ハあし。ハあし。ぞ。  
痛し。時ハあし。ハかゝる。痛し。時ハあし。ハあし。ぞ。

引據してをいひたるをいふ。ちんりして見ぬ教してごご  
 の有縁ひ事トヤとく。主念の本質トヤとく。り  
 と釋でさるじませけ時の三み世界もたけ天地も  
 かん實相之漏の大海トヤ。乞食の續と新よ  
 痛るるのそんよかきぬおとさきせよ之は曉の鐘  
 痛る時何ぶ有と釋迦も孔子もかん徳攻長乾も  
 かん大も猫もくろくむらり。十石も百石もかん  
 玉樓金殿もかん金銀財宝も宮も堂もも様も  
 乞食もくろくい回す事トヤ。痛と染と外の  
 見も六の。或は親子も痛てる。母親もあり。乳

吾子も何り外の見る見ても痛てるもの何ん  
 も知ぬ物の見ゆるは清てるがもかきくを  
 かん天地同根同性たが。我も。虚空同躰。此時始  
 而知衆生本来成佛。能考てぬらじませ。  
 是尊よとさ清もとく。叔目か明く。うれ  
 せよ之は曉の鐘。縁がんと鳴ると。虚よ今日の  
 とく。たトヤ。菴はすめの及鳥のかん。の及らる。く。  
 かあ。柿の本よ柿が。お來粟の本よ粟が。あまの  
 けかよ及はかんぞ。神道とり。佛及らる。佛道  
 とら人もけ事トヤ。觀見法界草木國土悉皆



成佛と天地の有りて成佛せぬもの何がある。會就草  
木よりありて悉皆成佛各性命と正してして。その  
分限し値ひるも其位より素くして行ふ外と願ひ  
も賣がらぬとありて。春咲すよと梅もやなく。  
柔がるとありて顔しり先く鶴もなく。箭をより  
残るもぬとありて冬枯しと木もかみ。強弱年  
癩の有りて西國四國ある程もたかぬ。ばは社會で  
従事の親に君ぬとありて。かりより暖地もたか  
る天命と値ひるも分外と教ひ求めざるゆへ。一切  
世に今だ成佛せぬもの何があるぞ。人どもありが

成佛せぬもの。はまする情なみ。がとまらざるものぞ。  
實相無漏の大海と五塵六欲の因へ吹ぬとも随縁  
ま如の浪のまぬ日もましと目も明くと随縁とありて。  
見ざるはけ。波もろけ。何げけいんか。りんとまひ  
おん。哀しんゆと。皆目も受りぬゆと。やぞく  
けまひとまゆも。まらりの教へまゆるとんて  
及と。まゆる事と知ぬゆの教と。佛家ぞ  
火宅とありしも。又八百四千の地獄とありて。アスワン  
の事と。目もく。何げけいんか。りんとまひ  
あつと。まはど。せり。杖と。せり。







らん色く抑ぐのものが無くば立くつら先つ数日。  
溜坑貝をすすりん汁うまのぶらりどや。  
と笑しんと立ち髪のおもひ中下年より。た致  
抄下及者中下年くくみくどんくと娘して  
吾や強や一寸先云時之夜の夜よくのよとく一白  
アと一寸先云和やなん在く周トヤソコテ不忠  
不孝を投中首くうと後と車抄のふひ破た  
一病りくく病りけ知ると事トヤタれと皆  
けげれと好くし居。名あくつ起る其おしく  
のともえんとけりとの二つふ故よ君おいその人

がる和と戒め候しとすがる病後ひらちり  
りく芝居も人々ゆらぬ酒も飲ゆなぬら  
茶をすゆゆなぬととととのやま自由な  
ふトやらん君よのたむのやけしとせむのい  
ない酒も飲どがらん茶所すゆがらん樂  
り西よまるとのトヤその一程く樂しむらん  
とれとくしむがらまひトヤ皆けものれい  
あひゆくトヤ和入のたわするがたトヤあ  
つひと和限と越すとがとく執りひ世界  
中一で君んのトヤまど君うたるトヤ











このトヤ。根柱を病に侵されし。坊さめもま  
しうし。忍せて。お事。し。と。忍。を。かり。その  
浦山。し。も。思。ら。ん。大。根。の。外。へ。何。ん。も。お。し  
望。い。か。ん。移。ら。う。病。も。い。せ。ぬ。又。どの。マ。な。ほ  
色。深。い。ん。ぞ。も。白。う。う。長。し。ん。と。う。う。腎。が。あ。る。  
テ。モ。勇。し。い。と。ん。と。ら。う。り。わ。い。い。の。娘。ト。と  
海。ら。ひ。い。て。も。人。ぬ。大。根。と。今。日。は。違。え。ら。れ。て  
初。ら。ん。も。移。り。も。る。事。い。か。ん。な。う。し。ん。の。ト。と  
れ。ゲ。モ。ウ。下。櫃。ト。来。ゲ。ツ。も。い。も。有。中。ツ。と。な。ら。ん。モ。ウ  
何。が。け。ん。が。り。い。わ。の。場。が。い。の。け。る。お。で。い。ゆ。れ

ぬ。の。と。あ。く。志。し。ける。是。ト。中。よ。う。り。て。孝。が。た。い。と。や。  
お。得。様。を。な。め。け。事。の。有。難。い。事。解。し。由。合。点。を  
さ。り。ませ。或。の。腫。物。で。も。お。あ。る。り。時。り。痛。い。よ。う。し。む  
は。い。い。の。や。う。い。ぞ。ど。い。ぞ。い。痛。す。し。ぬ。つ。し。何。と。い  
か。ん。ソ。レ。孝。を。お。し。や。か。ん。と。い。ぞ。今。一。度。お。腹。と  
し。て。り。さ。り。ませ。け。ら。う。し。を。ぬ。つ。し。何。と。い。ぞ。い  
皆。孝。を。お。し。ま。が。ら。う。と。お。腹。し。て。や。レ。娘。ト。や。ら。う  
が。さ。ん。ご。モ。ウ。あ。く。する。い。前。未。だ。百。病。か。し。し。時。の  
事。を。あ。か。めて。中。ら。し。じ。ませ。法。々。方。々。の。大。増。動。や。な  
し。事。で。有。し。承。を。と。承。と。意。々。に。酒。を。酒。に。飲



中の人が天地の融通の所施の今日中命  
 と繋いで事といひまがも忘る中いごと物え  
 ぐりて身の毒トや極樂好この極樂地獄の地  
 獄地獄の地獄すきとらよものトや何と吾  
 ぐりてからうぞ。序よお披露しんけるあけし  
 と法攝なめ業でさうりすん毒虫又蟹れらる  
 鳥織の毒をばけりて奇好なをとりすん。是れ何ん  
 どもさうりて見ると芳こがら鳥織と料理する時  
 すこの袋の破れぬまら中してとらふ急でらり  
 て。産干しとて重くお向干ひさむ。唾とてらる

けし付もぶしし亦病又咳もさうりよもいさうり  
 事でさうりすん。今やめ業やけどのくさう。是れ  
 胡乳とおろしとけまは。早連平念す。是れ久  
 しく困て重ん。胡乳を小口切よしと蓋茶碗の  
 ねよ入てぐりてと注ぐ。身の内ぬやうとて重けん  
 水よなる其水をけまは。忽ち平念にともも能く  
 笑て重てお披露わらして下りすを扱け火  
 傷よ付て火宅のくる。序よ出射しとせらる

通言二卷 卷上 一  
 一  
 一

道言二篇卷上

十一

道二翁道話二篇卷上終

